



日本 ハンザキ研究所ニュース 2010(9) : 通巻 No.57

発行 2010年9月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel / Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

日本オオサンショウウオの会

7年前に立ち上げた“オオサンショウウオの会”も第7回目の開催を迎えました。今年
は岡山県の真庭市湯原町で 11・12 日に開かれました。湯原町はハンザキの近代的生態研究
発祥の地です。鯪(はんざき)大明神やハンザキ保護センターがあり、毎年“はんざき祭
り”も催されてというハンザキの聖地です。しかし、残念ながら最近ではハンザキの研究者
が見当たりません。そして、ハンザキは種そのものが地域を定めず特別天然記念物に指定
されていますが、それ以前に岡山や岐阜、大分には生息地が国の天然記念物に指定されて
いる場所があります。研究者がいないためにその生息地の現状が不明です。このような状
況を改善するきっかけになればとの思いで開催を引き受けていただきました。真庭市教委
もその意を理解されて、保護センターのリニューアルなどをして開催に備えてくれました。



オオサンショウウオの会で特別出演していた山車を皆で収納

ノータリクラブの花坂さんによる“つちのこのはなし”は、一般参加の皆さんへの導
入という意味で大変面白い話で、参加者数も 150 人を超える盛況になりました。講演は川
崎医療福祉大学の梶田先生による“真庭地域におけるオオサンショウウオの生息環境”の
お話でした。研究発表や保護活動などの事例発表も 16 題があり、私は事前に申し込んでい
なかったのですが、急遽“ハンザキの伝染性疾病について”話題提供をさせていただきました。
総会では、会の名前に日本を付けること、桑原一司新会長(広島市安佐動物公園)
と岡田純新副会長(鳥取大学)、清水邦一新監事(姫路市役所)を選出し、本部事務局はハ
ンザキ研が引き受け、事務局長を私が、事務局員に黒田真澄(ハンザキ研理事)河井つま
き(アニマル・リンカー)さんと言う新しいスタッフで来年の愛知県瀬戸市に向かいます。



写真1 銀谷祭りで登場した130㍉のカモガワ・ハンザキ



写真2 今年のアンコ淵でのバトル



写真3 夜間のモニターに窺う2匹のハンザキが



写真4 3匹のライバルと対峙する黒主(印)



写真5 落とし穴で動けないハンザキ(上から)



写真6 メスの首切り死体(矢印)

円山川水系におけるオオサンショウウオ事情

会員 加賀見 省一 (豊岡市但馬国府・国分寺館長)

“円山川水系におけるオオサンショウウオ事情”の中で「大きな落とし穴」なんて言葉を使いましたが、今回は本当の落とし穴の話です。

今年の8月6日、今度は豊岡市役所出石総合支所に川遊びをしていた子供のお母さんから連絡がありました。場所は出石町福住の出石川支流奥山川、湯水で水がほとんどなくなっている河床のコンクリートブロックの穴の中にオオサンショウウオが動けなくなっているとのこと。今回も会議のため留守をしていたことから、当館と支所の職員が救出に行きました。河床に据えられたブロックは、長辺が1.8^m短辺は1.5^m厚みが50^{cm}と言う大きなもので、ブロックには吊り下げ用と思われる直径30^{mm}の穴があります。オオサンショウウオが動けなくなっていたのは右岸側に設置されたもので、ブロックの下面は川底の礫に接しており、周囲からの救出はできない状況なので仕方なく穴から腕を伸ばし入れて何とか無事救出できたようです。(写真5)

前回の反省を受けてあらかじめ写真の撮り方を説明していたので、全体と尾の左側面四肢の指などの写真も撮れています。オオサンショウウオは全長675^{mm}、体重2.35^{kg}で、頭部の中央に大きな傷痕があります。また、左の後足の指もなく、尾も短めで歪なことから先端部を噛み切られた可能性が考えられます。

職員にはマイクロチップの挿入方法を言葉で説明していたのですが、実技指導はできず、不安に思いながら読み取り機で確認した所、幸いなことにマイクロチップは既に挿入されていたようです。チップの番号は00067115D1で、豊岡土木事務所で教えていただいたデータによると、この個体は出石川水系の災害復興工事の関係で2007年5月17日に市内但東町久畑付近で保護され、2008年5月26日に高橋小学校前で放流されたものと分かりました。個体の詳細な情報は整理中ということで体の大きさや傷の有無は分かりませんが、今後もこのような事例が増えることでオオサンショウウオの成長や行動などが分かってくると思います。

放流地点の高橋小学校前から今回発見保護した地点まで距離にして約20^{km}、人為的な移動が行われていなければ、出石川をくだり(流され?)奥山川の合流点から300^mほど上流に上がった所でブロックの穴に落ちたこととなります。保護してから2日後に現場を確認に行きましたが、川は更に湯水で水溜り状態になり、水温も上昇して閉じ込められた魚も酸欠状態になっていました。オオサンショウウオの落ち込んでいたブロック穴から見た川底は完全に乾いて真っ白の状態でした。発見が数日遅れていたらと思うと本当に「ゾッ!」としました。

連絡を頂いた方、マイクロチップのデータを教えていただいた豊岡土木事務所の担当の方に紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

アユ漁と網入れ解禁

毎年9月の第一日曜日の正午から、市川のアユ網漁が解禁になります。ちょうどこの時期にハンザキも繁殖期を迎えます。そのために、アユコ淵への繁殖集団の観察に再々ハンザキ橋に立ちます。4日土曜日の午後からはアユ目当ての下見の人々が国道を歩き来し始め、川を覗き込んだりしています。ハンザキ橋を中心に校庭に接している230mほどの市川を漁協にお願いして禁漁区に設定していただいてから4年が過ぎました。子供たちの環境学習の一環としての観察の場に豊富な生物層を維持したいと考えたからです。川の中にサンクチュアリがあれば河川全体にも良い影響をもたらすことでしょう。たくさん増えた生き物たちは生息の場を広げるために川の中に散って行くのです。

下流を生野ダムで仕切られた流域ですから、海から上ってきたアユではありません。琵琶湖産のコアユや人工繁殖されたアユが放流されることが多いのですが、最近では生野ダムで作られた銀山湖で冬を越したアユが遡上してくるそうです。陸封されて人工湖を海として再生産が始まったようです。禁漁区で生き残った親アユが産卵し繁殖していることも考えられます。

「アユしか取らないから禁漁区に入れてほしい」と言う釣り人や網漁の方からの再三の申し入れもありましたが、「子供たちがアユの群を見て歓声を上げたり、再生産にも役立つのだから」と協力と理解を頂くようにしています。

銀谷（かなや）祭り

生野の街は祭りが多い所だ。雪の多い冬には開催されないもので、残りのシーズンに集中して次々とお祭りラッシュになる。その中で銀谷祭りは最大のイベントとして遠方からも多くの方が参加されるそうである。昨年からは出展依頼があってハンザキ研の活動やハンザキの生態を紹介すると共に、ハンザキグッズの販売なども実施している。ハンザキの多産する生野の街に住んでいても夜行性の水生動物であるハンザキを見る機会は少ないだろう。同じ特別天然記念物のコウノトリやトキは見に行けば見ることができるのに、ハンザキは難しい。こういった機会に実物を間近に見ることができれば、人々の関心も大きくなるはずである。

しかし、見世物的にハンザキを持ち出すことには文化庁の許可が出ない。そこで今年はカモガワ・ハンザキ（中国産とのハイブリッド）の全長130cmの大物に出演してもらうことにした。本当は日本産や中国産も並べてこの遺伝子汚染の現状も訴えたかったのであるが、それでも多くの方が足を止めて見学ブースに寄って行ってくれた。やはり生きているものの強さを示す結果だった。その反面、写真パネルをあまり見てくれないと言う欠点もあった。なかなか難しいものだ。それでも木彫りの特大ハンザキにまたがって嬉しそうにポーズをしている子供たちを見ていると、こちらの心もなごんでくる。

- 1日 ・黒主復帰！ 突然、アンコ淵の主として1年ぶりに姿を現す。
・円山川の河川工事現場から全長130㍎と102㍎の大型個体が緊急保護される
- 2日 メスのハンザキ首切り死体収容、2例目
- 3日 収容中のハンザキの伝染性腫瘍チェックのために、中間健康診断
- 4日 事務局会議、8名
- 5日 市川のアユの網入れ解禁、一組が禁漁区内に網を入れていたので注意
- 6日 ・県広報課取材、東京の県人会への広報誌で紹介をと
・元ABCテレビの島田敏宏氏来所
- 9日 ・穴粟市高齢者大学で講演
・内科へ行き、高血圧治療となる
- 10日 モニュメントの木彫2体、手直しに
- 11日 第7回オオサンショウウオの会 in 真庭大会開催（岡山県真庭市湯原町）
名称変更“日本オオサンショウウオの会”
会長・副会長交代 桑原会長、岡田副会長、清水監事（松月監事は留任）
本部事務局交代 栃本事務局長、黒田真澄事務局員、河井つまき事務局員
- 12日 岡山県内の施設、フィールド視察
- 13日 ・アンコ淵で黒主以外の7個体確認、盛んにバトルが見られる
・ハンザキ月例健康診断
・読売新聞取材（10月2日夕刊第一面に掲載）
- 14日 ・伊賀のオオサンショウウオを守る会の川上代表来所、COP10に向けて
・大外集落から大きなキノコ受贈、後日、横山先生に鑑定依頼予定
- 15日 大阪府能勢町から天王川の浚渫について相談に来所
- 16日 毎日放送取材に
- 18日 アンコ淵の繁殖集団は解散したよう（13～14日産卵？）なので録画を中止
- 19日 簾野地区の人工巣穴調査、3で産卵確認、40卵と流出卵40粒搬入
- 20日 ・毎日放送人工巣穴取材
・餌用のニジマス20㍎入荷
・ハンザキ保護センターの寒冷紗撤去開始
- 24日 毎日放送放映“ハンザキにかける人生”
- 25日 ハンザキ夜間観察会20名、人工巣穴の卵を守るオスの観察
- 26日 ・銀谷祭り出展、130㍎のハイブリッド展示
・産経・谷下支局長取材
- 27日 ハンザキ保護センターのポンプ停止トラブルあり、原因不明
- 28日 GS-306調査終了（9月10日～）、アコ・バスで姫路へ帰宅

メス・ハンザキの首切り死体

9月はハンザキの繁殖シーズンである。2日に近くの別荘の方がやってきて、「首から卵を産むのか？」と言う。一瞬何のことかと思ったが“首切り死体”だと気づいた。現場に案内していただくと、200 ㍍上流の支流長野川の左岸の深みに死体が沈んでいた。右前肢の脇から胃腸が飛び出していたが、オスの二次性徴が現れていない。繁殖期におけるオス同士のバトルではなさそうだと、ハンザキ研に持ち帰る。マイクロチップが埋め込まれた個体で、2年前にアンコ淵で登録（1431 で全長 490 ㍍）されたものだった。解剖すると、腹いっぱい卵があった。右わき腹なので正確には首切り死体とは言えないが、メスとして繁殖期における2例目の卵持ち個体の死体であった。（全長 515 ㍍とわずかな成長）

繁殖のために良い条件を備えた巣穴は多くない。そのためにオスは好適な産卵巣穴を求めて日中でも盛んに行動するようになる。良い巣穴を探し得たオスは穴をクリーニングしてメスの来訪を待つ。その間に次々と集まってくる他のオスを排除するために多大なエネルギーを消耗させる。オスの大きさに差があると首を咬み切られて死に至ることがある。ではなぜメスが咬み殺されてしまうのだろうか？（写真6）

“主”としてのオスの攻撃は他のオスだけにしか向けられないのか、まだ準備の整っていない場合にはメスへの攻撃もあるのではないかと考えられる。また、“主”以外の集まってきているオス同士では闘争は起こらないようなのだが、その理由は何であるのか？

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

先月のアンコ淵の巣穴が開通された翌日にハンザキの出入りが確認されたことも驚きであったが、9月になった途端に1年ぶりの黒主復帰と言うドラマがあった。一体彼らはどういうにして良好な繁殖巣穴を見つけることができるのだろうか？ 穴の奥からの僅かな水流を感じるのか、より低い水温を察知するのか聞いてみたいものだ。残暑厳しい中、河川水温もなかなか20度cを割らず、例年よりも2度cほど高い水温で産卵が遅れるものと思っていた。真庭のオオサンショウウオの会で聞くと広島も鳥取でも既に産卵があったという。アンコ淵では一向にそんな気配がないのになと思いつつ、12日の夕方にハンザキ研へ戻ってきた。数匹のハンザキがアンコ淵でウロウロしていたので、やっと繁殖集団が形成されつつあるのかなと思ったが、翌日には7個体を確認し黒主のパトロールが頻繁に見られた。例年通りの観察であり、水温の低下は関係ないのかとも思われた。14日も数個体とのバトルが観察できたが、翌日からは静まってしまった。24時間録画の再生を見せてもらったが、一昨年の凄いバトルとは異なった激しいバトルが再現された。それは、黒主が穴から頭を出している所へ、真上の岩の上から降りてきた個体が尾部を黒主に咬みつかれてしまった光景である。24時間肉眼で見ていることは不可能なので、やはり機械の力は有効だと思われた。（写真2）

（本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。）